

# シゴト ファイル

## 助産師

重松環奈さん(47)

日本赤十字社医療センターの  
産前産後看護師長



「毎日、赤ちゃんからパワーをもらっています」と重松環奈さん  
—東京都渋谷区の本赤十字社医療センター—

### ①相手を信じること

妊婦は病気ではなく、健康な人。より良い状態に導くために、相手の力を信じることも大切

### ②相手の思いを聞くこと

相手の希望に耳を傾ける。タイミングや言葉を選んで

### ③わかりやすく説明する

相手の方が良いことを理解してもらうために、簡潔に伝える

シゴトの  
極意

これだけは  
アイテム



おなかにいる赤ちゃんの位置を確認する時やお母さんに触れる時、「指先の感覚が大事」と重松さん。日頃から保湿をして手を大事にしています。

先輩へ  
メッセージ

### ちがうことを受け入れて

物事の感じ方は人それぞれ。ちがうことを受け入れると、相手との関係が一段進むかもしれません。相手を理解しようとする、相手もあなたを理解してくれるかも。「みんなちがって、みんないい」のです。

# 妊娠から育児まで 心と体をサポート

妊娠中から出産後の育児まで、お母さんと赤ちゃんのサポートをするのが助産師の仕事です。出産時には医師やほかの看護師などと連携し、赤ちゃんを取り上げます。

重松さんは東京都渋谷区の本赤十字社医療センターで、出産前のお母さんが入院している病棟の看護師長をしています。病院に隣接する日

本赤十字看護大学に在学中の実習で、人に力を与えるかわいらしい赤ちゃんのところに、助産師になりました。助産師にはさまざまな仕事があります。分娩時には母子の体調を管理し、少しでも楽にお産が進むように、マッサージをしたり体位を整えたりします。お産がうまく進まないときや命の危険があるとき

きは、医師に引き継ぎます。分娩が順調であれば、最後まで助産師が中心となって介助し、赤ちゃんを取り上げます。重松さんが助産師として初めて赤ちゃんを取り上げた時、「意外と重かった」と言います。生まれたばかりの赤ちゃんはぬるぬるしてよく動き、受け止めるのに必死だった

たそうです。「いろいろな重さを感じて緊張しました」産前産後を通して、母子の体調を確認するのも助産師の大きな仕事です。妊娠や出産に対する悩みや、分娩の仕方などの希望に耳を傾け、必要に応じて支援の計画を立てます。産後は赤ちゃんのお世話の仕方を説明し、育児疲れや気分の落ち込みを感じるお母さんの話を聞いて心のケアをします。また、医療のサポートが必要な赤ちゃんを医師や看護師らと慎重に見守ります。重松さんは妊娠中にお子さんを正しく抱えたお母さんや産後の育児に不安を抱えるお母さんに対するケアにも力を入れています。(森泉明香)

### あゆみ

1972年、福島県生まれ

■小学校時代

保健係としてけがをした子を連れていったり、消毒したり。看護師があこがれの職業だった

■部活に打ち込んだ中高時代

吹奏楽部に入部し、パーカッションを担当。福島県立磐城女子高校(現・磐城桜が丘高校)3年の時、助産師の仕事を知る

■91年

日本赤十字看護大学看護学部に進学し、助産師と看護師の国家資格を取得。卒業後、保健師の資格も

■95年

日本赤十字社医療センターに入職。血液内科、消化器内科で2年間、看護師として人体や病気の知識全般を学んだ後、産科へ。2002年に長女を出産し、ママ助産師として育児との両立に奮闘

■2015年

日本赤十字看護大学大学院を修了。フルタイムで働きながらも、妊娠中や出産した女性に対するメンタルヘルスと母乳育児の支援について研究に励む

### ターニングポイント

#### 救えなかったつらさ

助産師になって5年目の頃、担当した女性が、おなかにいた10か月のお子さんを亡くしました。もっと自分にできたことがあったのではと、悔しい思いをしました。救える命を守るため、医療関係者との連携を密にとるのも助産師の重要な役割です。この経験を機に、お子さんを亡くしたお母さんに対する「グリーフケア(悲嘆のケア)」にも力を入れるようになりました。